

第 20 回山梨県介護老人保健施設大会抄録用紙

演 題	妻のそばでその人らしい最期を
副 題	ウィスキーはお好きでしょ♪

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツハマナス
施 設 名	介護老人保健施設はまなす
フリガナ	カンゴシ コバヤシ マミ
発表者(職名・氏名)	看護師 小林 真美
フリガナ	フクダリッカ ホカハマナスシヨクインイチドウ
共同研究者	福田六花 他はまなす職員一同

【はじめに】

超高齢化社会である近年、老健をはじめ高齢者とその家族を支えるための施設の重要が高まっている。老健は在宅復帰できるようサポートすることが役割の施設であるが、ターミナルケアへと移行される利用者様も少なくない。今回、その人らしい最期を迎えられることのできたひとりの利用者様の様子をここに報告する。

【事例紹介】

- ・ A 様 82歳 男性 要介護5
- ・ 既往歴 脳梗塞 (H15)
心臓細動 (H15)
アルツハイマー型認知症 (H15)
総胆管結石 Ope (H21)
誤嚥性肺炎 (H26)
骨髄炎にて右下肢大腿部より切断 (H27)
褥瘡悪化にて左第2趾切断 (H27)
胃瘻造設 Ope (H27)

【経過】

- H15. 1月：脳梗塞（右麻痺・失語症）を発症。リハビリHPを経て5月自宅へ戻る。妻介護での在宅生活スタート。当施設、デイサービス・ショートステイ利用開始。
- H23. 6月：9月までの3か月間はまなす入所。
- H26. : 誤嚥性肺炎にて入退院を繰り返す
- H27. 3月：経口摂取困難となり胃瘻造設。造設後も妻の希望もあり経口摂取を継続するも体重減少あり栄養状態の悪化が著明となる
- H27. : 褥瘡の悪化にて左2趾切断
- H27. 8月：骨髄炎を発症し、右下肢切断
- H27. 9月：退院し訪問介護・ショートステイを利用されながら妻の献身的な介護が続く
- H28. 6月：10年以上にわたる妻の介護疲れもあり妻が体調崩され、まなす入所

【入所後】

H29. 3月10日より痰がらみの頻度が増え吸引施行の回数が増え、胃瘻から栄養注入の回数を減らし点滴施行を開始する。3月18日より胃瘻からの栄養注入が完全中止となり、点滴持続することとなる。3月22日、全身状態低下・回復の見込みも低いためカンファレンス行い、まなすにてターミナルケア開始することが決定した。3月23日、呼吸抑制も出現しはじめ酸素吸入開始、JCS:Ⅲ-200/300となり最期の時がせまってきた印象の為、再度妻へインフォームドコンセント施行。延命処置は行わないとの決断をされ、A様に何をしてあげられるか検討する。その中のひとつに大好きであるウィスキーを飲ませてやりたいと妻から提案があり、「ガーゼで唇を湿らす程度ではあったが、夫婦ふたりの穏やかな時間を過ごすことができ良い思い出になりました」とのお言葉をいただく。亡くなるまでの間、妻が病室に寝泊まりすることもあった。職員も妻の体調を気遣い、積極的に労いの声掛けをした。3月29日、妻に見守られて永眠される。

【考察】

キューブラ・ロスは死の5段階モデル〈1否認と孤立→2怒り→3取引→4抑うつ→5受容〉を唱えている。ここでインフォームドコンセントの重要性が発揮される。最終段階の受容に至ることが理想的な死なのだろうか、そこにいきつける者はごくわずかかもしれない。在宅復帰を目的とした施設ではあるが、ターミナルケアを行う。一見、矛盾しているように考えていたが、老健で勤務していく中で、“生活の延長線上に死があり、看取る時期が来る。在宅復帰を目的とし、ターミナルとなるまでその人らしい生活を送れたのであれば最期の時まで私たちができる最大限のケアを提供・発揮し、寄り添ってさしあげることが人間対人間の関わり合い”と考える。

【おわりに】

家族の代わりにはなることはできないが、身体的・精神的に苦を排除し、本人らしく人生の最期を迎えられるよう寄り添うターミナルケアの奥の深さをこれからも追及していきたい。

